

---

# 剣聖將軍記

やま次郎

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

剣聖將軍記

### 【Nコード】

N4359Y

### 【作者名】

やま次郎

### 【あらすじ】

室町幕府第十三代將軍・足利義輝

彼ほど幕府の復活に力を尽くした人物はいなかったと思う。八代義政以降、彼前後の將軍はどれも見ても傀儡將軍でしかなく、自身の力で將軍親政を目指していたのは彼だけだったのではないか。儂くも時の天下人の間で藻掻き続けるも命を散らすことになるが、彼の周りには後に天下に名を轟かす名將たちがいた。「天下を治むべき器用有」とも称された義輝がもし自らの力（領地&兵）を手にした

らどつなるか？

それを話にしてみようと思っ。

## 第一幕 天下争乱 - 將軍弑逆 -

### 劍聖將軍記

序章 〱 異見・永禄の変〱

永禄八年（1565）五月十九日、洛中にて変事が起こった。

足利幕府十三代將軍・足利義輝の住まう居館が突如、軍勢に襲われたのである。

御所を囲む軍勢は、旗印から京畿一帯を領する三好家の手によるものだと判別できた。

また三好家中でもその名を轟かせている松永氏の軍勢もあつた。

御所を襲撃している兵は一千足らずだが、三好勢は將軍を逃がさぬよう洛中全体に兵を配備しており、その数千を数えた。対する義輝側は百から二百余り。それも女子供を合わせた数である。僅かながら洛中にいた幕臣らが駆けつけてはいたものの焼け石に水であり、御所の囲みを突破して義輝の下へ辿り着ける者などは誰一人もいなかった。まさに多勢に無勢。義輝の死は絶対であつた。

ただ義輝も座して死を待つ気はなかつた。

足利義輝、御年三十。

幕府の、武家の長として衰退の一途を辿る將軍家に歯止めをかけ、復権を目指す最中で己を高めることを忘れなかつた。その甲斐もあり、故事、礼式に精通、武家の長として恥ずかしくないよう劍術を始めとした武術を悉く修めた。南蛮渡来の鉄砲もなかなかの腕前だ。

しかし、それまでだった。結局は個人の域を出るものではなく、読み漁った兵法書も用いる機会なく死を迎えようとしている。それほどまでに時代は義輝に残酷だった。

前年に三好長慶が死に、將軍親政を目指して反撃に出ようとした矢先のことだった。今少し時間があれば、逆転も可能だったかも知れない。

「もはや考えても詮無きこと！最後は思う存分に暴れてくれようぞ」

この状況においても逃げ出さず忠義を尽くしてくれている家臣たちが如何に時間を稼いでいようとも、この場で自害して果てるような真似はしない。せめて一矢を報いる。義輝としての最後の意地だった。

もはや宝物としか見られなくなった先祖伝来の名刀の数々を次々と畳へ突き刺し、本来の形で使用しようというのだ。天下に名高き名刀と塚原卜伝と上泉信綱に認められた己の業。それが何処まで三好相手に通じるか、試す最後の機会。

五月雨は 露か涙か 不如歸 我が名をあげよ 雲の上まで

足利義輝、最後の戦いが始まった。

〃 〃

洛中、三好左京大夫義重（後の義継）の陣内。

「ええい、將軍はまだ討ち取れんのか！」

義重が辺りに喚き散らす。戦いが始まってより半刻（一時間）余り、小勢の將軍を大軍かつ奇襲したのにしては時間がかかっていた。

「少しは落ち着かれよ、左京殿」

「されど日向守。義久（のちの松永久通）めの為体（ていたらく）は目に余る。こちらからも援兵を出すべきではないのか？」

日向守と呼ばれた三好日向守長逸はゆつくりと首を横に振った。

そして若い義重を諭すように話し始める

「よいですか。此度のことは理由はどうあれ將軍を殺すのです。天下に悪名を轟かすことになりましょう。なればこそ、義重殿がその悪名を背負うことがあつてはなりません」

つまり長逸は自らは兵を繰り出さず、將軍暗殺を松永一手に行わせようというのだ。そうすることにより將軍殺しの汚名は松永が着ることになり、三好家は潔白とまではいかぬとも下手人ではなくなる。それなら後々に新將軍を擁立した後に政敵・久秀を追い落とすことも可能と踏んだのだ。だからこそ共謀したふりをして將軍暗殺に手を貸していたのだ。

長逸は冷静にこの戦いの意味を話していたが、内心は少し焦っていた。それは將軍方の予想外の反撃が理由だった。

（このままでは松永勢は全滅するやもしれぬ。そうなれば嫌でも我らの軍勢を繰り出さねばならん）

四方の門から雪崩れ込んだ松永勢であったが、小笠原民部少輔、一

色淡路守ら幕府奉公衆の反撃に為す術もなく討たれていた。何故なら、主たる義輝も武術に秀でていたが、その稽古に付き合っていた奉公衆らも揃って武術に秀でた者たちだったからである。一人で二人や三人を相手にするなど奉公衆らにとっては造作もなく、一人で十人を斬った者すらいた。だがその奉公衆も圧倒的な数の前に力尽き、次第に数を減らしていく。

この続報に長逸は胸を撫で下ろした。どうやら計画通りに事は運ぶと。だが、そんな思惑は次に飛び込んできた報せですぐに吹き飛んでしまった。

「も、申し上げます！将軍方と思われる一団に御所への侵入を許しました！」

「何じゃと!？」

長逸は耳を疑った。洛中には数千にも及ぶ自軍が展開している。御所を囲んでいるのは松永勢だけとはいえ、囲みを突破できるだけの人数が発見されず近づけるわけがない。

「敵の数は分かるか!？」

「そ…それが…僅か10人足らずでして……」

「うつけが!その程度で狼狽えるな!」

長逸が床几から立ち上がり、使番の肩を思いつき蹴り飛ばす。その後ろで義重は「義久めがここまで戦下手とは知らなんだ」と呟きながら「日向守も落ち着かれない」と先ほどとは反対の立場で言葉をかけた。

「ふん!」

憤慨しながら自分の席に戻った長逸は、蹴り倒した使番に「將軍も  
るとも御所内に進入した一団を討て」と命じた。後にこの判断は間  
違いだつたと長逸は悔いることになる。

〃 〃

変わって御所内。義輝は一人瞑想に耽っていた。

周囲に味方の姿はなく、あるのは無数の人垣。十は軽く超える。義  
輝の手には曲がった刀が赤い鮮血を垂らしていた。

「どうした？来ぬのか」

「ひっ!？」

義輝はギロツと雑兵を睨みつける。そこには先ほどまでの戦意はな  
かった。

ほんの僅か前、將軍を発見した松永兵は『一番手柄』と、勇んで斬  
りかかってきた。それを一瞬の間に斬り伏せ、二人、三人、四人と  
倒していった。だが、誰一人として義輝に手傷を負わせることは出  
来ない。雑兵共は皆、一斉に恐怖した。

「来ぬならばこちらから参るとしよう」

動と静。先ほどまでその場から一切動かなかった義輝が新たな刀を  
畳から引き抜くと、人垣を飛び越えて一目散に松永兵に近づく。

怯える足軽を上段から一閃。バツサリと真つ二つにした。

侍大将が用いる筋兜ならいざ知らず、足軽程度の陣笠では義輝の一



等から頭部を守ることなど出来ない。ましてや義輝の持っているのは数ある刀の中でも名刀と呼ばれる逸品である。陣笠は綺麗に二つに割れ、頭部からは鮮血が飛び散った。

返り血を浴びた義輝の姿はまるで仁王の如く、周囲を凍り付かせた。義輝は隣の足軽を横一線に斬りつけて蹴り倒し、刀身を胸部に突き立てた。さらに睨まれた足軽は持っていた手槍を力なく繰り出す、それは軽々と躲され、脇差しで脇腹を刺された。

「ふ……、たわいもない」

屋内であることから義輝を一度に襲える人数は限られている。多対一になったところで一人で百人と戦うわけではない。かといって槍や刀で義輝相手に満足に戦えるものなど現れず、震えた手で弾く弓など躲すのは造作でもなかった。

突然に虚無感が、義輝を襲う。

存分に暴れて斬り死にしようと思込んでいたものの、実際に戦ってみれば力の差は歴然としていた。戦っても戦っても一方的に相手を斬るだけ。しかもここから見える敵の半数近くは戦意を失いかけている。

（これを斬ったところで、余の心は晴れまい）

ここらが潮時、やはり自害して果てるか。そう思った瞬間だった。遠くから大きな足音が近づいてくる。明らかに集団だ。敵の増援かとも思ったが、どうやら違うらしい。松永兵の様子がおかしい。

途端、いくつもの呻き声上がり、足軽たちが倒れる。逃げる者を

多数いた。

「ご無事か！公方様！！」

「な…勢州！？」

驚いたことに現れたのは義輝の師・上泉伊勢守信綱その人であった。

「おやおや、こりゃ随分と暴れたようじゃな」

「ト伝殿もか！」

「息災かな、大樹公」

続いて現れたのは塚原ト伝（つかはらぼくでん）。これもまた義輝の剣の師である。流石というべきか、この状況においても周囲を眺め、軽口を叩く余裕がある。

「どうしてここへ？」

「話は後じゃ。まずは……」

とト伝が言い終わる前に、背後から松永兵が二人に襲いかかった。

ト伝は刀で防ぐ。が、刀が折れてしまう。ここに来るまで何人も斬ったのだろう。無理もない。刀自体が保たなかったのだ。しかし、折れた刀で素早く相手の首筋を斬った。また信綱は初めから刀を持っておらず（途中で失われた）、掌底（しょうてい）で相手に胸元を一撃して怯んだ隙に脇差しを心の臓へ突き刺した。

さらに二人へ松永兵が襲いかかる。二人の危険を察した義輝が後方へ飛び、畳に突き刺してあった刀を二振り引き抜くと、そのまま二人に投げ渡した。

「師！童子切、大典太にござる！」

「ほう……これが……」

「…天下五剣か！」

刀を空中で受け取った二人はそのままの勢いで松永兵に斬撃を繰り出す。するとまるで豆腐を切ったかのように斬れるではないか。鎧もなにもあつたものではない。

「……見事な切れ味よ」

「塚原殿。悠長に感慨に浸っている時間はありませぬぞ」

「お…おお、そうであつたな。大樹公、我らが来た意味、分かるであらう？」

「御所よりの脱出。つまりは余に生きよ、と申されるか？」

「さてな。されど大樹公が脱出されなければ、儂と勢州はここで死んでしまふな」

ト伝の目が笑っていた。これを見て義輝は「師には敵わぬな」と呟き、死に場所と決めていた御所を脱出することに決めた。過程はどうあれ、大恩ある師二人を自分の運命に巻き込む訳にはいかない。

「北へ落ちる。よいな」

「はっ！」

義輝ら三人が走り出す。すると先ほどまで凍り付いていた一部の松永兵も動き出した。流石に逃がすわけにはいかないと感じたのだろう。しかし、義輝らに松永兵が追いつくことは出来なかった。松永兵は御所内は不案内であり、何処をどう曲がれば北口に出るか知っている義輝に敵わないこと。また何故か義輝が進む先には敵兵の姿はなかった。あるのは死骸だけである。これを不思議に思った義輝だったが、庭先に出たところでその答えに出会すことになった。武

士の集団が松永兵と戦っているのである。しかも武士の集団は皆が皆、目を見張るほど強く相手を圧倒していた。

「豊五郎！退くぞ！」

「叔父上！」

信綱が集団に加勢するが、信綱の加勢を必要としないほど既に一方的な展開だった。彼らが御所内の松永兵を倒したのだと義輝は理解した。

「彼らは柳生。我らの味方じゃ」

「柳生！？松永家中の者ではないですか！」

義輝は柳生の名を知っていた。何せ目の前にいる信綱本人から「柳生の者を弟子にしている」と以前に指南して貰っていた時期に聞いていたからだ。その柳生、今となっては当主である宗庵を始め主立った者は信綱に弟子入りしており、驚くべき戦闘集団へと変貌していた。それが今、義輝の味方として眼前にいる。

「細かいことは後じゃ。北門の近くに堀の一部がまだ普請中の場所があるじゃろう。そこから逃げるぞ」

義輝の住む二条御所は増築中であり、特に掘や土塁など外周部分を堅固にするために普請の最中だった。それもあらぬ襲撃に備えるためだったが、普請が終わる前に襲われるという結末に至ったのは皮肉としかいいようがない。

義輝一行が北へ走り出す。敵も追っては来るが、幸いにも四方に散らばっており、特に門周辺に集まっていたから向かう先に敵は殆どいなかった。（僅かにいた兵は全て斬り伏せられた）堀の隙間から

出り、土塁を飛び超えて路地に出る。流石に北門に陣取っている兵たちには見つかったているが、周囲にはそれほど敵の姿はない。とは言っても遠巻きにいるのだろうか。

「こちらへ」

柳生の手の者の一人が近くの民家に隠してあった馬を連れてくる。これで脱出しようというのだろうか、馬は四頭しかいなかった。

「公方様に付き従うは私と塚原殿。それに足田豊五郎の三名にござる」

「柳生の者は？」

「公方様もご存じのように柳生は松永の配下です。これ以上の手助けは宗厳殿の立場を思えば無理にござる。されど柳生の者が公方様をお助けしたこと、忘れぬようお願い致します」

「うむ、覚えておこう」

四人は馬に跨がり、東に向けて走り出した。もちろんこれを松永兵は追いかけることになるのだが、互いの距離は広がるばかりだった。洛中は暮盤の目のように整備されており、基本的に直線で走る事ができる。そこで差が出るのは馬の質であった。義輝たちが乗る馬は実のところ柳生の者が御所近くにあった將軍家の厩より拝借したものであり、地方の大名から献上された駿馬である。逆に追う松永兵は騎馬を許されたとはいえ身分の低い者が乗る駄馬であり、完全武装をしているために重い。その差が、距離となって現れていく。

義輝たちは五条大橋を越えて山科へ向かう。不思議とその先には三好勢の姿はなかった。何故なら、松永の使番に扮した柳生の者が、「將軍は伏見へ逃亡した」と偽りの報せを送り、義重と長逸は全軍を南へ向けていたからである。



## 第一幕 天下争乱 - 將軍弒逆 - (後書き)

初投稿、やま次郎と申します。

元々こういう小説が好きでいろいろと妄想(笑)しているネタがいくつもあり、どこかで書いてみたいと思っておりました。こうやって物語を書くのは初めてなのでアドバイスなど頂ければ幸いです。

また架空戦記なので史実と違う状況(設定)も今回の塚原ト伝、上泉信綱、柳生のように今後も現れます。史実の雰囲気なぶち壊すような真似はしないと思いますが、何せただの歴史好きなのでそこら辺はある程度広いお心で読んで頂ければと思います。

さて、参考までに永禄の変頃の各地の情勢を下記に書いておきます。

永禄八年(1565)

上方では三好長慶(前年に死去)が死んだばかりで権力の空白が起こっている。

中国では毛利元就が尼子の月山富田城を猛攻中。

東海では織田信長が美濃攻めの真つ最中。途中、伊勢にも手を出している。

甲信越では武田が上杉と直接対決から外交戦へと路線変更。上杉は関東重視の方針。

関東では北条家が对上杉、対里見戦で一進一退。

奥羽では伊達と最上が融和。蘆名が武田と組んで上杉にちょっかいを出している。

九州では大友が北九州を席卷中。島津は薩摩、龍造寺は肥前統一前。また今回の永禄の変で記述していない義輝の妻子がどうなったかで

すが、これは史実通りとしています。

生母・慶寿院 自害  
正室・御台所 捕縛  
側室・小侍従 殺害  
子息・輝若丸ら三人（二人？） 殺害

最後に個人的なことです。好きな武将として「時代（条件）が違えば、評価の変わっていたらろう」という境遇の武将が好きだったりします。

例えば：

足利義輝（室町幕府が江戸幕府のように盤石なら名君？）

毛利隆元（毛利三矢が健在なら対織田戦線が変わった？）

織田信忠（信長が横死せず、普通に天下を引き継いでいたら？）

松平信康（切腹せず、関ヶ原あたりを迎えていたら？）

武田義信（彼が武田を継げば信玄のように四面楚歌に陥ることもなかった？）

長宗我部信親（彼が存命で関ヶ原を迎えていたら？）

三好秀次（彼が生きていれば家康の天下はなかった？）

ま、このように二代目辺り武将が好きなのですが、この辺りは次回作（もうかよっ！？）で書くかも知れませんが。あつ、でもオーソドックスに信長とかも好きですよ。（でも信玄よりは謙信の方が好きです。それは物語の途中からも出てくると思いますが…）

以上、今後とも宜しくです。



## 第二幕 脱出 - 明智十兵衛登場 -

逢坂の関。

二条御所より脱出した義輝ら一行は近江へ逃れるべく、是が非でも通らねばならない場所である。古来より都のある山城と近江を繋ぐ古い関所である逢坂の関は、近江国大津に在する三井寺の支配下にあり、親足利氏の立場にあるのだが、三好・松永らが義輝を襲うのであれば、この地に兵を配しているはずである。案の定、関所に三井寺の者は見えず、三好方と思われる兵士の姿が見える。三十人ほどだろうか、見えない位置にいる者も含まれば多くても倍の五、六十といると考えた方がいい。

「むづ……如何するか」

義輝は物陰に隠れて様子を窺っているが、はつきりいつて相当量の返り血を浴びている義輝たちの格好は異質であり、とてもすんなりと通れるとは思えない。かといっていずれは虚報で伏見辺りを彷徨っている三好・松永の追っ手も義輝の行方に気が付くはずであり、悠長に考えている時間はなかった。

「こうなれば強行突破しかないか……」

御所での壮絶な乱戦を思えば、この程度の戦いは容易に思えた。しかし、それを師ら二人に伝えようとしたところ、言葉が詰まった。

塚原卜伝と上泉信綱。この二人が肩で息をしていたのだ。特に卜伝の息切れが激しい。義輝は我に返った。二人はかなり高齢である。

信綱は六十手前、ト伝に至っては七十半場である。その二人が危険を顧みずに御所へ討ち入り、挙げ句ここまで騎馬で疾走してきたのである。壮年である自分ですら多少息を荒げているのだ。ここで強行突破をしようものなら自分は抜かれても師二人は力尽きて死ぬだろう。本来なら將軍である義輝は、師を犠牲にしても生きるべきなのだろう。しかし、それが出来ないのが義輝という人間だった。

そこへ、偵察に出っていた疋田豊五郎が戻ってきた。この男、信綱を叔父と呼んでいることから一族の者なのだろうが、歳は若く義輝と同年に思えた。剣の腕も申し分ない。頼りとするならこの男だろう。

「叔父上、意伯が戻って参りました」

「おお、間に合ったか！」

サツと豊五郎の後ろから意伯と呼ばれた男が現れる。

「公方様、紹介が遅れて申し訳ござらぬ。こちらは我が甥の疋田豊五郎。そして者は鈴木意伯と申し、二人とも我が門弟にござる」

「うむ、二人ともよき面構えじゃ。また豊五郎とやら、剣武の才は叔父譲りと見える」

「その御言葉、この豊五郎にとって最高の褒め言葉にございます」

豊五郎が深く頭を垂れる。その下の表情は言葉通り嬉しそうである。若さ故か、正直に顔に出ることは悪いことではない。義輝もそのことで多少は緊張が解れてきた。

だが意伯が戻ってきたのはただ義輝に紹介するためではない。

「もうまもなく大和へ向かっていた明智殿がここへ参ります。合流

後、関所を突破いたしましたしょう」

そう言うと、近くで集団が近づいてくる足音が聞こえた。足音の聞こえた方へ視線をやると、身なりの悪い十人程度の集団がこちらへ近づいてくる。咄嗟に刀の柄に手をやる義輝だったが、集団は五間（約10メートル）ほどの距離で止まると、先頭にいた一人だけが近づいてきた。

「このような格好で公方様に御前に参上いたすこと、お許しを。某は明智十兵衛光秀と申します。後ろの者らは皆、公方様の御味方にございます」

明智光秀と名乗る者の格好は粗末だが、物腰は穏やかで高位の武家の出であることが分かった。これが將軍家再興に大きな役割を果たすことになる光秀と義輝の初めての出会いであった。

「急ぎます故に概略のみ説明させて頂きます。まず私が敵の注意を引き、疋田殿、鈴木殿を先頭に後ろの者らが関所へ乱入いたします。公方様は塚原様と伊勢守様らと共に関所を抜けて下さりませ。坂本まで行けば、兵部大輔（細川藤孝）様の兵がおります」

「兵部が？」

義輝はここまでの一連の出来事を思い返し、疑問に思った。突如、御所を襲われた義輝。そこへ諸国を放浪しているはずの師二人が現れ、明智と名乗る者が関所突破の支援に来た。さらには腹心の細川藤孝が兵を率いて坂本にいるという。これが何を意味するのか、義輝には分かる。つまりは事前に三好・松永が暴挙に出ることが分かっていたのだ。ならば、なぜ自分に報せなかったのか？

そんな義輝の疑問を察したのか、光秀が答える。

「実は此度の襲撃、公方様ではなく覚慶様と周蒿様を狙ったものでした」

「なんじゃと!?!」

覚慶、周蒿とは義輝の弟たちのことだ。覚慶は興福寺、周蒿は相国寺で仏門に入っている。

「兵部大輔様は初め、これは三好・松永の公方様へ対する恫喝と考えました」

「で、あろつな」

昨今、將軍職は義輝の祖父・義澄の血統が受け継いでいる。義輝の父・義晴には兄弟がいないため、その血を受け継いでいるのは義輝の他は弟二人と義輝の子たちとなる。しかし、將軍職を受け継げる血統はもう一つあった。

十代將軍・義植の血統である。

義植と義澄は將軍職を争いあった間柄。一度は將軍職を追われた義植が西国最大の大名であった大内義興と細川高国の支援を受けて義澄を打ち倒し、將軍職に再任された。それをまた追い落とし、それが義晴である。それから義輝と將軍職は引き継がれているが、義植の血統は三好方の勢力圏で生き続けている。もし義輝兄弟、親子に何かあれば將軍職を継ぐは義植の血統となる。

「それを知ったのが二日前。公方様に仔細を御報せする間もなかった故、兵部大輔様は独断で我らを救出に差し向けました。その途上で襲撃の対象者に公方様が含まれていることを知り、周蒿様救出に向かっていた塚原様、上泉様、そして覚慶様救出に向かった我らが

急遽公方様の救出に向かった次第」

光秀の説明で概ね理解した義輝だったが、同時に弟たちの安否が気になった。

「ご安心あれ。覚慶様救出は和田伊賀守（惟政）様が、周蒿様救出には一色式部少輔（藤長）様が向かっております」

またしても光秀が義輝の心を察して答える。

「大樹公、時間が惜しい。積もる話は坂本に着いてからにしようぞ」  
少しばかりの休憩で息を整えたト伝が促すように義輝へ話しかける。

「左様ですな。で、明智とやら。如何にして奴らの注意を引き付ける？」

「はっ！これにございます……」

光秀が後ろを向き、手招きで配下の者呼び寄せる。配下の者は、細長い木箱を担いでおり、光秀の隣にその木箱を置くと、蓋を開けて中身を取り出した。

「これは……鉄砲ではないか！？」

木箱の中に入っていたのは鉄砲だった。それも三挺。火薬、弾を込め、火薬を置き、火縄を付ける。射撃までの一連の動作を光秀は流れるように行う。それを三挺とも行う。

「公方様、参ります。御仕度を……」

「うむ」

光秀は鉄砲を抱えると関所から半町（約55メートル）ほどの距離まで近づく。まだ気づかれない。

配下が二挺を持ってついていく。まだ気づかれていない。

片膝をつき、狙いを定める。兵の一人がこちらの様子に気づいた。

火蓋を切り、発射態勢に入る。気づいた兵が指揮官らしき男へ報告する。

まだ撃たない。指揮官らしき男は周辺に指示を出している。

バンツ！

銃声がし、指揮官らしき男が倒れた。

「次ッ！」

光秀が配下から鉄砲を受け取ると、素早く射撃体勢に移る。

バンツ！

先ほどとは違い、即座に撃った。一人倒れる。

再び鉄砲を受け取り、構える、撃つ。もう一人倒れる。

「今じゃ！」

鉄砲を放り投げると、抜刀、配下に合図を出す。後方に控えていた

残る八人が一斉に弓を構え、放った。八本の矢が飛ぶ。しかし、どれも三好兵を仕留めるには至らない。だが兵たちは動揺している。

「うおおおお！！」

大きな喚声を上げ、豊五郎と意伯を先頭に武者たちが関所へ乗り込む。動揺している雑兵など豊五郎の敵ではない。即座に一人斬り伏せる、二人、三人と斬りつけた。それに負けずと意伯も二人を斬りつける。中には反撃してきた兵もいたが、力が入っていない斬撃は簡単に防がれ、返す刀で冥土へ送られた。

光秀配下の男たちも大いに暴れる。が、こちらはそれなりの腕は持つとはいえ屈強の者というわけではない。反撃を受けて負傷する者もいる。うち一人が手槍で肩を貫かれる。

そこへ義輝が騎馬で乗り込んできた。

横から割り込んで馬腹をそのまま三好兵にぶつけ、吹っ飛ばした。そして男の肩に刺さっている槍を刀で斬り落とした。

「あ……ありがとうございます……」

「よい。それよりも先へ行け。その怪我ではまともに戦えぬ」

「し……しかし……」

「構わぬ」

その言葉に男は躊躇する。男の使命は義輝を守ることであって、義輝を置いて先へ行くことなど出来ないのだ。

「大樹公の護衛は我らに任せよ」

同じく騎馬で関所に乗り込んできたト伝が義輝と同じように男へ脱出を促す。だがそれでも男はこの場を離れようとしなない。残った片腕で刀を構え、義輝を守ろうとする。

(この男も命を賭して余を守ろうとしておる……)

御所で多くの者が死んだ。苦難を共にしてきた忠臣たちが多く。そして名も知らぬ目の前の男の命も消えかけている。これ以上、自分のために他人を死なせたくない、という想いが込み上げてくる。

「ならば余から離れるな。余と共にあれば、死なせはせぬ」

と言つて義輝は騎馬から降りた。

「大樹公!？」

この行動にト伝と男は驚く。しかし、義輝は自ら敵兵に近づき、斬撃を振るう。やむ得ずト伝と信綱も馬から降りて義輝を追いかける。

將軍の存在に気づいた三好兵が一斉に義輝へ近づく。相手は四人。

「義輝公!!!」

義輝の下へ向かう敵兵に気づいた光秀も慌ててその場を離れる。

三好兵の一人が手槍を義輝に突き出す。身体を捻ってこれを避け、右手で槍を掴む。そのまま力任せに槍を引っ張ると、左手の刀で三好兵の喉元を斬り裂いた。血飛沫が飛び、義輝の身体を覆う。それに一瞬戸惑いを見せた兵たちを義輝はギロリと睨み付けた。



赤く染まった義輝の姿を見て、兵たちは怯えた。為す術もなく一人が斬られ、二人は駆けつけた信綱と光秀に斬られた。

「公方様ツ！御自身の立場を理解なされませ！」

まるで親が子を怒るかのようになり、信綱が義輝を叱責する。將軍に対し、このような物言いが許されるのは天下広しと言えど劍の師である信綱とト伝くらいだろう。

「皆の者、円陣を組め！」

光秀が指示を出し、全員が義輝のいる場所へ一斉に集まる。

「このまま一斉に東へ抜けます」

「……………それでよい」

光秀は敵に聞こえないよう周囲に小声で指示を出す。その様子を隣で見つめる義輝。

（この男……………、鉄砲が得手だけでなく剣術も達者ときた。しかもこの状況で適格に指揮を執るなど、一廉の将と見たが……………何者だ？兵部の家臣ではあるまい）

義輝は光秀に対し、強い興味を持った。光秀が藤孝の家臣ならば、何かしらの折に見かけたことがあるはずだったが、それはない。何処かの家中の者が藤孝に協力しているのだろうと思ったが、何処の家中か想像つかなかった。

義輝がそんなことを考えているなど露とも知らない光秀は、指示を出し終わると配下に合図を出した。

「行けッ！」

全員が一斉に東へ駆け出す。そうはさせまいと三好兵も立ち塞がるが、数こそ三好方が多かったが、その強さは義輝方が圧倒的だった。そもそもこの襲撃の指揮を執っている三好長逸は最初の襲撃で片が付くと考えており、この地に配していた兵は言わば形だけの存在であり、数を集めたただだった。名実ともに『劍豪』である義輝らとともに戦える者はいない。まさに圧倒的だった。このまま戦い続ければ三好兵を全滅させてしまうのではないかというほどに。しかし、義輝たちの目的は関所の突破であって敵の殲滅ではない。最初の一撃で包囲網が破られると、堰を切ったように義輝方が囲みを抜け出した。それを追う余裕は、三好方にはなかった。

負傷四名。義輝たちは一人の死者も出すことなく逢坂の関を突破した。この先は江南に勢力を持つ六角氏の勢力圏であるために容易に追っ手を差し向けることは出来ないと思われる。義輝は突然の襲撃から生還したのだ。

歴史が変わった瞬間だった。

【続く】

## 第二幕 脱出 - 明智十兵衛登場 - (後書き)

第二回、投稿です。

いや、文章を書くって難しいですね。戦闘シーンとかもう大変です。さて、早くも明智光秀登場です。本文中では何処かの家中と書いていますが、まあすぐに明らかになりますし、想像通りです。特に特別な設定はありません。(ただ早く登場させたかっただけ)

また更新頻度ですが、ある程度の構想は出来上がっているので上手く行けば1週間に1回(目標は2回)出来ればと思っています。良ければ続けて見て頂ければ嬉しいです。

第三幕 逃避行 - 三好・松永の追撃 -

五月十九日、夕刻。

大津の宿場で馬を手に入れた義輝一行は、近江坂本で細川兵部大輔藤孝の軍勢と合流した。

「上様！ご無事で！」

「おお、兵部！」

義輝の姿を確認した藤孝が駆け足で近寄る。また義輝も腹心の出迎えにようやく安堵感を覚えた。

「兵部の機転の御陰ぞ！大義じゃ！」

「いえ、上様の身を危険に晒してしまいました。この不始末……御詫びのしようがございませぬ」

藤孝が地面に額を擦りつけ、平蜘蛛の様に平伏して謝罪の言葉を口にする。

「よい……よいのじゃ。余はこの通り生きておる」

「はっ……。塚原様、伊勢守様、上様の御助け頂いた御恩、一生忘れませぬ」

藤孝は僅かに上体を上向け、義輝の両隣に控えるト伝と信綱に礼を述べる。

「それは違つぞ、兵部。恩を受けたのは余であり、そちではない」

と、言つと向き直り、義輝は自分の救出に尽力した者たちへ話しかける。

「塚原殿、信綱殿。これまで方々より頂いたものは数知れず、尚も窮地を救つて頂きました。その礼として、その童子切と大典太を差し上げます」

これには流石の二人も驚いた。童子切と大典太は義輝の持つ鬼丸国綱、二条御所で失われた三日月宗近、甲斐国久遠寺に納められている数珠丸と合わせて『天下五剣』と称されるほどの逸品である。それを下賜されることは、剣術家としては最高の誉れ。

「その二振りは天下の名刀。名刀は使い手を選びます。御二人であれば、申し分はござらぬ」

「左様か、ならば頂いておこう」

素直に礼を受け取る信綱に対し、ト伝は刀を手にとって黙り込む。そして……

「儂は遠慮しておこう。近く、まともに剣を振るうこと適わなくなる身じゃ。此度の事で、それがよう分かった」

「何を仰います！塚原殿の剣捌き、まこと見事なもの。まだまだ若い者には……」

「儂のことは儂が一番よう知っておる。だからといって信綱殿が貰うことにケチを付けているわけではない。儂が持つよりは、豊五郎、そちが貰つておけ」

「わ…私がッ!？」

突然の指名を受けた豊五郎は思わず仰け反った。驚きで次の言葉が出ないほどに。

「無論、師の信綱殿と大樹公の許しがあればだがな」

「私なら構いませぬ。豊五郎の腕前、けしてその刀に劣らぬものと思っております」

「余も異存はない。豊五郎にも恩賞を与えなければならぬしな」

「は……有り難く頂戴いたしまする」

大きな体軀を小さくして刀を受け取る豊五郎。また鈴木意伯には義輝が持っていた正宗の脇差しが与えられた。

「さて明智にも何か褒美を与えねばならぬが、すまぬ。今の余にはそちに与えられるものがない」

「私など気にかけることもございませぬ。その御気持ちだけで嬉しゅうございます」

「そうか」

「それよりも公方様。まずはこの場を急ぎ離れましょう」

「ん？」

今いる坂本は六角氏の勢力圏内とはいえ、三好の勢力圏とも近く、奴らが將軍を襲うという暴挙に出た以上は何があっても不思議ではなかった。

「離れるということは、朽木谷か？」

朽木谷は湖西・近江高島郡に位置する將軍家の避難所である。先代の義晴も京を追われる度に坂本より朽木谷へ避難した。幼少期の義輝も同行している。

「は……。まずは」

「まずは……とは、如何なることじゃ？」

「実はこの光秀、朝倉家に仕えております」

「左衛門督にか？」

藤孝が補完するように話す。

「……ふむ」

義輝が考え込む。

越前一国を領する朝倉を頼ることは理解できなくもない。しかし義晴方として京に軍勢を送り込んでいた先代の孝景とは違い、現当主の左衛門督義景は上方の政情には一切の興味を示さず、義輝の協力要請を何度も理由を付けて断っていた。そのため、義輝は朝倉が今さらになつて自分を受け入れる意味が理解できないでいた。

「我が主は公方様を受け入れることを了承しております」

「まことか」

光秀はまるで以前から決まっていたかのように淡々と話す。この時、光秀は嘘を言っていた。確かに光秀は朝倉家に仕えているが、義景は義輝がどのような状況下にあるかまったく知らないでいた。そもそも興味がないのだ。しかし、光秀には考えがあった。一方的に義輝が越前へ赴けば、義景は受け入れるしかない。

「う…む。ならばともかく朽木谷へ参るとしよう。兵部、案内を頼む」

「はっ、承知いたしました」

義輝一行は藤孝の軍勢に守られながら朽木谷を目指すことになった。

〃 〃

京・三好政康邸。

將軍・義輝の暗殺に失敗した三好三人衆、松永親子が集まっていた。

「あれだけの軍勢を擁しておきながら將軍を取り逃がすとは何たるさまか！」

開口一番、松永弾正少弼久秀が実行犯である三好長逸らを罵った。久秀には分かっているのだ。長逸が実子・久通に將軍暗殺の汚名を着せるべく、積極的に兵を動かさなかつたことを。それが將軍を逃がしてしまった最大の要因となつたことを。仮に三好勢が洛中に配していた兵を全て將軍暗殺に向ければ、流石に義輝も命はなかつただろうことは明白だった。

「ふん、貴様とて覚慶に逃げられておるではないか」

事実、久秀は担当していた興福寺の覚慶の捕縛に失敗しており、まんまと逃げられていた。が、この事自体は將軍に逃亡されたことと訳が違う。

「將軍に逃げられることと、仏門に入っている弟に逃げられることを同列に扱って貰っては困る」

二人は責任の擦り付け合いに終始している。何の意味もない会話だ。それよりも今後、どうするかが問題であり、政康がその事を指摘した。



「まずは將軍の行方を捜さねばならぬ」

「將軍は逢坂関を通ったのであるう？ならば六角領に逃げ込んだのではないか？」

逢坂関で將軍一行らしき人物は通ったことは報せを受けていた。ならば先に義輝が京を追われた際、江南に勢力を持つ六角承禎（義賢）の援助を受けているので、今回もその伝手を頼ったものだと思われる。

「いや、それはない」

と、久秀が即座に否定する。

「なぜ言い切れる」

「六角領に將軍が逃れた、という報せを受けておらぬからだ」

「だからなぜそう言い切れるかと聞いておるのだッ！」

長逸が声を荒げる。しかし、久秀は惚けたまま答えようとしない。長逸は確かに三好一門ではあるが、久秀も前当主・長慶の娘の正室に迎えておりほぼ同格にある。現在の当主である義重から問われないう限り、仔細を明かさなくても良いのだ。（ちなみに義重はこの場にはいない）長逸は目的こそ同じ為に行動を共にしているが、久秀のこつという独断性の強いところを嫌っていた。

「それよりも將軍の御台を捕らえたと聞いた。まことか？」

「ん？ああ、確かに捕らえてはいるが……」

「ならば儂に渡して貰おう。使い道がある」

「それは構わんが、それよりも將軍の行方だ。このままでは拙い」

長逸にとって、將軍の御台などどうでもいい存在だった。それより

も將軍の息の根を止めなければ、今ある立場が危うい。それが大事だった。

「將軍は恐らく朽木谷だ。仕留める気があるのなら軍勢を遣わせ」

「朽木谷か：確かにその可能性もある。が、兵を出せば六角が黙ってはいまい」

「ああ、その心配はない」

なぜか六角のことになると久秀は確定的なことを言った。しかし、当の久秀自身がその問いに答える様なことはなかったために理由は定かではなかった。ただ久秀の言うことを事実として受け止めるしかなかった。將軍を京から追ったにも関わらず、長逸らは追い詰められていた。

「下野（政康）。阿波より義親（後の足利義栄）を呼び寄せておけ」「なに？しかし將軍は健在だぞ？」

「構わぬ。もはや將軍を討てるかどうかは問題ではない。時間との勝負だ」

三好三人衆と松永久秀の目論見は、將軍・義輝を暗殺し、阿波にいる足利公方・義親を新たな將軍へ据えることだった。言いなりにならない義輝に代わり、義親を將軍に天下を采配する。なに、酒と女を与えていれば何とでもなる。そう考えていた。

「わかった。ともかく我らは朽木谷へ兵を出す。それでいいのだから？」

長逸が久秀に確認する。語気から納得のしてないことは分かるが、久秀の言うとおりにするしか方法がないことを理解しているため、やむを得ず従う。

「ああ、それでよい。ともかく御台を我が屋敷に移して貰う。まずはそれを急げ」

そう一方的に命令した後、久秀は屋敷を退去した。最後まで久秀は將軍暗殺に失敗した我が子へ言葉をかけることはなかった。

|||||

五月二十一日。

近江高島郡・朽木谷城

この地で義輝はようやく一時の安息を得ることが出来た。この時までに、義輝には吉報と凶報の二つが届けられている。

吉報とは和田伊賀守が興福寺の覚慶救出に成功したということ。凶報とは一色藤長が相国寺の周蔭救出に失敗したこと、である。

またこの地に着くまでに剣術の師である塚原卜伝が単独で陣列を外れ、姿を消していた。これについてはそれほど気にはしなかった。元々気まぐれな人物であり、単に役目を果たしたから去って行っただけだろう。

しかし、この地での安息は義輝の気を一時でも休ませてはくれなかった。

(余はまんまと生き延びてしまった。家臣を見捨て、妻子を守れず……何が將軍ぞ！何が武家の棟梁か！)

義輝はこれまでのことについて自問自答を繰り返していた。だが前向きな答えは一向に出ない。不甲斐ない今の自分を許すことが出来ないのだ。

そこへ義輝を突き動かす一つの報せが入ってくる。

三好勢凡そ五〇〇〇、朽木谷を目指して行軍中。

瞬く間に城内は戦慄した。朽木家が擁する兵は最大で五〇〇ほどあり、まともに三好勢と戦える力はなかった。報せを受けただけで城内は混乱に陥り、誰もが義輝へ退去を進言してきた。しかし、義輝はそれらを一蹴する。

「狼狽えるでないわ！うぬら我が奉公衆であるう。三好輩など恐れるに足らず。堂々と迎え撃てばよい」

とは言ったものの、義輝もまともに戦って勝てるとは思っていない。しかし、もう逃げるのは嫌だった。それよりは堂々と戦い、死にたいと思っていた。そんな義輝の胸中を知らず、藤孝は朽木谷からの退去を諫言する。

「ここで戦っては無駄死にするだけです。そうならば塚原様らの働きが無に帰してしまいます！」

「それは……分かっておる！しかし余は、御所で家臣らに冥土で会おうと言った。このままおめおめと生き延びれば、あの世における妻子らにも寂しい想いをさせる」

義輝は軽い自暴自棄に陥っていた。安息の刻が義輝に考える間を与えたが、いくら考えても將軍暗殺に及んだ三好・松永らに勝てる方策は思い浮かばなかった。だから、ならば、とここで死ぬ決意を決

めたのだ。

「なりませぬ！なりませぬ！」

藤孝が必死に翻意を促す。しかし、義輝は一向に取り合わない。その間にも三好勢は朽木谷へ僅か一刻（二時間）のところまで迫っていた。

「良かった！間に合いました！」

そこへ明智光秀が飛び込んで来る。

「公方様！今すぐ越前へ御移り下さりませ。国境まで行けば朝倉左衛門尉（景紀）様が出迎えに参ります」

「光秀殿。それはまことか？」

その報せに藤孝が喜色を浮かべる。

「はっ！道中に浅井備前守（長政）様の御領地がありますが、通行の許可は得ております」

「なんと！」

光秀は義輝と共に朽木谷へ着いてすぐ、越前へ戻っていた。それより僅かに二日、朽木谷に戻ってきたばかりか出迎えの仕度を万端整えて来ていた。並の才能ではない。（実際は一乗谷まで行かずに敦賀の景紀を訪ね、浅井の小谷城へ赴いて船で琵琶湖を越えて朽木谷へ戻った）

「よい、明智。余はここに残る」

が、尚も義輝は動こうとしない。

「何故にございますか」

無礼と承知ながら、光秀は義輝へ理由を問いた。

「越前へ逃れたところで、余はまた三好から逃げ続ける日々を送るだけじゃ。奴らには勝てぬ。ならばそのような生き恥は晒しようない。ここで戦い、せめて一矢だけでも報いてくれる」

と、己の決意を告げる。が、光秀はそれをまったく意に介さずに自らの想いを述べた。

「勝てまする！」

「なに？」

「勝てる、と申しました！」

義輝は光秀の“勝てる”という言葉に心を動かされた。三好家との戦いは今回だけではない。天文一八年（1549）に三好長慶が管領・細川晴元を追った時よりずっと続いていることである。それから一六年、義輝はずっと三好家打倒に費やしてきた。その三好家にこの男はいとも簡単に“勝てる”という。心を惹かれない訳がなかった。

「朝倉は二万の兵を抱えております。また盟友・浅井も一万余の兵力を有しており、若狭には公方様の義兄・義統様があり、江南の六角殿も公方様の御味方でございます」

光秀は都合の良いことを言い続ける。確かに表向きは光秀の言うとおりだ。しかし、現実はそのとはいかない。朝倉は加賀一向宗との交

戦中であり、二万の兵を上洛させることは不可能。また若狭も現当主の義統と前当主の信豊との間で内乱が起こっている。さらには浅井と六角の関係は最悪であり、將軍の命と言えど協力するとは思えなかった。しかし、光秀にとってはそんなことはどうでも良かった。都合の良いこと並べ立てても義輝へ翻意を促し、越前への動座に同意してくれればいいのだ。現に義輝の心は揺れ動いている。義輝としてはここで華々しく死ぬのも良いが、本音としては苦しめられてきた三好家を滅ぼし、妻子や家臣たちの仇を討ちたいという気持ちがある。それを光秀は知っていた。

「さらには越後の上杉様も、公方様の為に兵を動かされましょう」  
これがとどめの一撃となった。もちろん光秀は越後国主・上杉輝虎のことなんて全く知らない。知っているのは義輝の要請に応え、五千もの兵と共に上洛したということだけだ。しかし、そんな大名は全国の何処にもおらず、義輝が越後上杉を頼りとしていることは簡単に想像できた。

そのことを指摘された義輝も、胸中では“輝虎ならばあるいは…”  
という想いが無いわけではない。

「……………分かった。余は越前へ移る」  
ようやく義輝が越前への動座に同意する。しかし。義輝には一つ心配の種があった。

「元綱。そなたも余と参れ」  
朽木弥五郎元綱。この朽木谷一帯を治める領主であり、幕府奉公衆の一員である。既に奉公衆は瓦解しており、生きている者は僅かだ

ある。元綱はまだ十六であり、死なせたくなかった。

「いえ、公方様の御供をしたいところですが、朽木谷は我らの本貫にございます。当主たる私が離れる訳には参りませぬ」

「ならぬ！ならぬぞ！そなたが動かねば、余も動かぬ！」

これ以上、家臣を失いたくない義輝は、是が非でも元綱を連れて行くつもりだった。そこへまたしても光秀が助言する。

「元綱殿。我らはこれより公方様に伴って越前へ落ちます。まもなくこの地には三好勢が押し寄せて参りますが、いきなり攻撃を仕掛けるような真似はしないでしよう。降伏の素振りを見せ、半日だけ持ち堪えて頂きたい」

「半日？それで良いのか？」

「はい。半日たったところで、本当に降伏して下さって構いませぬ」  
「しかし、奴らは公方様の居場所を聞き出そうとするのでは？」

「その時は正直に御答えになって下さい。越前におると」

「答えて良いのか？」

「ええ。そうすればこの地を追われることも命を取られることもありませんまい。どうせ三好が公方様の居場所知ったところで、何も出来ませぬ」

光秀の言うとおりだった。越前朝倉は二万の兵を抱える。京まで派兵するとなれば全軍を出すことは適わないが、越前国内で戦となれば嫌でも全軍を出す。しかも三好家が越前を攻めれば、後方を浅井家に衝かれることになり敗北は必至。その上で勝つには朝倉・浅井両方に備えるだけの兵力を差し向けるしかない。しかしただでさえ周辺国に敵を抱え、本国・阿波と海を隔てている三好家にそれだけの軍勢を越前へ送ることは不可能だった。



「見事じゃ！明智！」

光秀の見事な策に義輝は素直に感動を覚えた。自らの胸中を図り、それらを解決する策だったからだ。

「兵部。各地に散らばっておる者どもらに余が越前へおることを伝えい。越前にて再起を図るぞ！」

「はっ！承知！」

光秀の策で立ち直った義輝の言葉で全員が外に出る。己の役目を忠実に果たすために。

こうして義輝ら一行はようやく辿り着いた朽木谷の地から越前に移るようになった。

【続く】

### 第三幕 逃避行 - 三好・松永の追撃 - (後書き)

第二幕ですが、第三回です。(ややこしいですね)

義輝が越前へ移るのは史実の義昭に沿ったことです。(若狭經由ではありませんが…) 將軍でなかった義昭を受け入れたのですから、將軍たる義輝を受け入れないわけがない。そう思いました。まあ本文中では光秀の独断ということになっていますが、史実でも動きを見せなかった義景のことです。こういう展開もありかと。

またいきなり義輝の許を去った塚原ト伝ですが、ネタバレしますが本編中ではもう登場しません。(年齢が年齢ですし)ただ時間と連載が進めば補完的にト伝が主人公の外伝を書くかも知れませんが、あまり期待しないで下さい。(信綱の方はもう少し活躍します)

#### 追記

初投稿作品で使い方に慣れず、タイトルが分かりづらく(第三回なのに二幕とか)なっていたのを修正しました。

#### 第四幕 越前朝倉 - 一乗谷評定 -

五月二十四日。

越前・一乗谷城。

日も落ちた頃に義輝は敦賀郡司・朝倉景紀の軍勢に守られながら朝倉氏の本拠・一乗谷へ入った。とりあえず義輝は城下の安養寺へ案内された。

翌朝、義輝は寺の庭先から一乗谷を眺めた。

朝倉家は初代越前守護・朝倉敏景が一乗谷へ本拠を移してより凡そ百年、この地から越前を治めている。本拠たる一乗谷城は一乗山の尾根に長く築かれており、南北半里強もの大きさを誇る。足羽川を天然の堀とし、東・西・南は山に囲まれている。まさに鉄壁。

昨夜は暗くて分からなかったが、翌朝になって一乗谷の大きさが一望できた。また城下の賑わいも流石に京ほどではないが、相当なものだ。かなりの人間が住んでいるだろう。

（朝倉左衛門督……侮っておったが、一乗谷がこれほど繁栄しておるとは……。案外、期待できるやもしれぬ）

朝倉二万を自在に操るほどの男ならば、対三好戦の中核を担える。そう思った義輝であったが、そうそうに期待を裏切られることになる。

正午を迎える手前、左衛門督義景が家臣団を引き連れてやって来た。形式的な挨拶を受けた後に評定を開くことになっている。もちろん

三好討伐についてだ。

現れた義景の姿を見て、義輝は啞然とした。

(まるで公家ではないか……)

華奢な体躯におっとりとした顔つき。顔色も青白く何より目が死んでいる。義景の姿に、戦国武将たる威厳はまったく感じられなかった。

反面、朝倉家臣から見た義輝の印象は違った。

体躯は平均よりやや大きい程度だが、筋肉質な身体は戦国武将に足るものであり、顔には真新しい刀創、眼光は鋭い。また生まれからくる高貴さも漂わせている。何より数日前まで死闘を演じていた義輝からは覇気が溢れていた。

「左衛門督義景にございます。まずは上様が御無事であったこと、祝着に存じます」

義景が挨拶する。それに対し、

(征夷大將軍ともあろう者が、命からがら恥も外聞もなく京を追われて何が祝着なものか！)

と胸中で叫ぶ義輝だった。

「うむ。余は此度、不覚にも京を追われたが、再び京に戻り、逆賊を討ち滅ぼす覚悟である。その為にも左衛門督の力、頼りにしておくぞ」

しかし、こう言わなければならない今の己の無力さを呪うしかなかった。

「勿体無きお言葉にございます。当家に全て御任せあれ。必ずや京への道、この義景が切り開いて御覧に入れましょう」

そう義景が立派に決意表明するが、その語気にはまったく力が入っていない。義輝は落胆した。これでは朝倉の兵も頼りにならない。そう思ったが、義景の後ろに控える家臣団の中にはそれなりに骨のありそうな者も垣間見えた。朝倉家とて無為に百年もの間、越前を治めていたわけではない。当主が戦に出ずとも、名将として武名を轟かせた朝倉照葉宗滴が鍛え上げし軍団は未だに健在だった。

「上様は帰洛を求めてござる。よって上様が京へ戻られるための策を講じて頂きたい」

いよいよ評定が始まった。藤孝が進行を行う。その手始めに義景に対し、意見を求めた。

「当家が声をかければ、近江の浅井が合力することは必定にございます」

が、中身は乏しいものだった。

浅井長政。江北三郡を治める若き太守である。永禄四年（1561）に起こった野良田合戦では六角軍二万五〇〇〇を一万一〇〇〇で破ったことは記憶に新しい。しかもこの戦、長政にとっては初陣であり、このように華々しく初陣を飾った例は珍しい。そんなことだから、義輝自身も長政には期待を持っている。しかし、朝倉と浅井が

仲が良いことは誰もが知っていることだった。

(他に案はないのか)

義輝と藤孝も朝倉・浅井の両家連合を基礎に物事を考えている。だが義景はそこしか考えていなかった。そこから先の案なんて、義景にはない。何故なら義景自身、二日前まで義輝が自分のところに来るなんて思っていないく、二日前に景紀から報せを受け、もうこちらへ向かっているというから受け入れるしかなかった。義輝の手前、『迷惑だから出て行け』とは言えないだけなのだ。それでも二日間は考える時間があったのだから、少なからず何か案が出てきても良いと義輝は思っていたが、期待は裏切られた。

(それでもようも『当家に全て御任せあれ』などと言えたものだ)

そもそも朝倉は長年に亘って浅井家としか同盟しておらず、朝倉・浅井で何事も何とかなると考える風潮がある。今回のことも朝倉首脳陣はそれ以上のことは考えていなかった。

「皆々方、三好・松永を侮ってはなりません。先年、教興寺の合戦で三好修理が動員し軍勢は、六万にも及びます。それを念頭に、策を講じられたい」

藤孝の話に場がざわめく。

無理もない。朝倉と浅井が上洛に動員できる兵は凡そ二万余である。それですら大軍のだが、相手はその三倍の兵となると怖じ気づきもする。しかし、義輝も藤孝も今の三好に六万もの兵が動員できるとは思っていない。

三好の版図は全盛期から大きく変化していないが、三好長慶を失っている。この事で上方の反三好勢力が勢いづいており、その中核が義輝なのだ。機先を制されて京を追われはしたが、反三好勢力はどれも健在。もし義輝が朝倉・浅井と上洛軍を発しても、全軍をこちらへ向けることは出来ないだろう。せいぜい三万数千、これが義輝の見立てだ。

「恐れながら……」

末席で一人の武者が声を上げる。

「何者か？」

「左衛門尉景紀の子、景恒にございます」

朝倉景恒。昨年の加賀攻めで兄を亡くし、敦賀郡司職を継いでいる若き一門である。

「景恒。上様の御前ぞ。若輩者が出しゃばるでないわ」

上席から声が飛ぶ。一門衆の筆頭として紹介された朝倉式部大輔景鏡（かげあきら）である。この発言に景恒の父・景紀も眉をしかめている。この両者、仲が悪いのだ。それも景恒の兄が加賀攻めの陣内で景鏡との口論の末に自害したからだ。

「よい。考えがあるのなら申すが良い」

義輝が制す。

見苦しい。そう義輝は感じたのだ。意見があるのなら言えば良い。それがどんな者でもだ。でなければ評定に参加している意味がない

というもの。それに若い者なら尚さら聞いてやらねば不満は溜まる一方となる。本来ならばこれを制するのは当主たる義景の役目なのだが、当の義景は景鏡寄りの考えのようで、義輝の裁定に不満があるようだ。表情は僅かにしか変わっていないが、分かる。生まれてよりずっと人の顔色を窺って生きて来なければならなかった義輝だ。このくらいは読める。

発言を許された景恒は揚々と話し始める。

「まずは若狭に兵を入れるべきかと」

「若狭へ？」

「はつ。若狭は今、守護の義統殿と先代の信豊殿が争っております」

「うむ。知っております」

「義統方には当家が、信豊方には三好が支援しております」

「それも知っております」

要は若狭において朝倉と三好が代理戦争を行っているのだ。現時点では義統方が優勢。しかし、予断を許さない状況にある。

「もし当家が公方様を戴いて上洛した場合、信豊方に背後を脅かされる可能性がございます。その前に、若狭を完全に義統殿でまとめる必要があります」

「そうすれば、上洛の折に若狭の兵をも使えるか」

「御意」

流石に若狭と接する敦賀郡を治める景恒だ。若狭の事情に明るい。多くは父の景紀が手にしたものだろつが、着眼点は評価できる。

「されど余としても出来るだけ早く上洛したい。早々に若狭の争乱を鎮められるか？」



「公方様の御出馬があれば……あるいは」

自らの出馬。それは義輝も上洛まで考えていなかった。

「控えい！公方様に出馬を求めるとは凶に乗るでないわ！」

「そうじゃ！そうじゃ！」

席上から景恒に向けて野次が飛ぶ。どれも景鏡方の者たちだろう。やはり見苦しい。これで上洛が叶うのか。そう思う義輝だったが、景恒の案は捨て難い。義統は義兄であり、若狭に自らの影響力を強めるために出て行った方がよいかも知れない。

「よい。余が出向こう。仕度を頼む」

「はっ！はっ！！」

景恒が頭をぶつけるのではないかと思うほど、勢いよく頭を垂れた。よほど嬉しかったのだろう。それほどまでに景恒は家中で孤立していたのだ。義輝の同意が得られたことで、今回の若狭出兵は景恒が采配できる。加賀攻めではないが、兄の無念も少しは晴れる。

「公方様。上洛を目指すには、加賀一向宗との和睦が不可欠でございます」

今度は景鏡が意見を述べてくる。元々持っていた意見なのか、景恒に遅れまいとしたのかは分からないが。

「我らが越前を留守にすれば、一向宗が国内に雪崩れ込んでくる」とは必定にございます」

「で、如何にすればよい」

「当家を加賀守護に任じて頂けないでしょうか。その上で加賀へ攻

め入り……」

「それでは火に油を注ぐだけであろう」

「そ……それは……」

言葉が詰まる。結局は景恒の意見が取り入れられたのに触発されて発言しただけだったか。自尊心が強い。それだけの人物。それが義輝の景鏡評になった。その景鏡が大きな顔をしていられる家中など、やはり底が知れている。

「事を荒立てる必要はない。要は余が上洛する間、じつとしてくれればよいのだ。奴らの大半は農民がほとんど。こちらから攻め入り、田畑が荒らされる心配がないと分かれば和睦にも応じよう」

この件については、余計な事情を挟まないためにも藤孝にやらせることにした。幕臣が直接出向き、やりとりをした方が相手の感情を刺激しなだけ和睦はまとまり易いだろうと思われた。

（されど、若狭を手に入れたとしても兵が足りぬ。左衛門督も思ったほど頼りにならぬし、やはり頼りにすべきは……）

義輝は静かに目を瞑った。脳裏に思い浮かべたのは二人の人物だった。

【続く】

## 第四幕 越前朝倉 - 一乗谷評定 - (後書き)

第四回です。

ここまで順調に書き上がりました。このペースを続けたいところです。

また今回まで義輝の呼称が様々で分かり辛いと思います。(そうでもない?)

上様：直臣(藤孝) や守護大名クラス(義景)

公方様(義輝公)：陪臣(光秀や朝倉家臣)

大樹公：身分に関係のない者(ト伝など)

という分け方になっています。(ただ信綱の場合、武家に仕えていた名残で公方と呼称しています)ま、雰囲気を変える場面もあります  
が…

### 追記

初投稿作品で使い方に慣れず、タイトルが分かりづらく(第三回なのに二幕とか)なっていたのを修正しました。

## 第五幕 希望 - 上洛への道 -

越前一乗谷。

評定は未だ続いていた。

「上洛するとなれば、やはり六角殿へ支援を頼むべきであろう」

「されど六角と浅井は敵対しておるぞ」

「そこは公方様に取りなして頂くしかあるまい」

話題は六角家についてだった。

湖西を通るにしろ、湖東を通るにしろ上洛を目指すならば必ず六角領を通ることになる。そのためには江南に勢力をもつ六角家の支援は不可欠である。しかし、朝倉の家臣たちが考えるほど義輝は六角承偵を頼りとはしていなかった。

六角家はそもそもずっと義輝方として三好家と戦い続けており、江南では今でも大きな勢力を誇っている。義輝方の最有力と言っても過言ではない。それは間違いない。それなのに、なぜ義輝は六角に期待していないのか。その原因はこれまでの経緯にあった。

六角承偵は何度か三好家に勝っている。永禄元年（1558）に義輝が帰洛を果たしたのは承偵の御陰であると言えるし、教興寺合戦の前哨戦である將軍地蔵山の合戦では三好方に勝利し、久米田合戦では長慶がもつとも信頼する実弟・三好義賢を討ち取っている。しかし、何故か承偵はその後に軍勢の動きを鈍らせ、最終的に教興寺合戦で義輝方（六角・畠山連合軍）は敗北し、三好の天下を決定づけた。

(ここ一番であやつは頼りにならぬ)

もし教興寺合戦で承偵が畠山軍支援に動いていたら、そう思わなかったことはなかった。

「その話はもうよい。承偵には遣いを出す。兵を出すとなれば申し分ないが、領地の通行を認めるだけでも構わぬ」

堂々巡りの議論をここで続けていても埒はないと思つた義輝は、決定を下した。

「されど上様。六角殿の支援なくば三好の兵を上回ること叶いませぬ」

藤孝の指摘通りだった。

皆の脳裏には、朝倉・浅井で二万。若狭勢が三千。これに六角勢を加えることによって三好に対抗できると考えている。

「分かつておる。されど、当てがないわけではあるまい」

「と、仰いますと?」

「ほれ。朽木谷で明智が申しておつただろうが」

「まさか……上杉!？」

上杉の名が出ると、場がどよめいた。上杉の名は、朝倉家中でもよく知られている。朝倉にとって正式な同盟国は浅井家だけだが、上杉家とは加賀を中心に勢力を有する一向一揆との戦で何度も連携している。また永禄二年(1559)に上杉輝虎が上洛した際には北陸道を通っており、領地の通行許可を与えた朝倉家へ礼を言つたため一乗谷も訪れていた。

「されど上杉様は越後。上方まで来られるかどうか……」

「無理は承知じゃ。輝虎も余が任じた関東管領職を全うするため、信濃や関東へと忙しく働いておろう。そんな輝虎に頼むが心苦しくはあるが、余の苦境を訴えるしかあるまい。あの折と同じく、五千でも構わぬ。強兵たる越後兵ならば、万騎に値しよう」

この発言には義景を含め、朝倉家臣は驚いた。義輝は輝虎へ対し『上洛して来い』と命じるのではなく、『来て欲しい』と頼むのだという。これほどまでに将軍が臣下の者に謙ることは珍しい。正直、義景としてもこの自家との扱いの差はいい気はしなかった。

本来ならば義輝にとってここで義景の機嫌を損ねることは良いことではないのだが、無視した。どうせ今のままでは上洛は叶わない。それよりは他を特別扱いしているところを見せ、奮起してくれた方がいい、と。

だが問題は誰を遣わすかだった。上杉家との連絡役は大館晴光が務めていたが、先月に亡くなっていた。また他の幕臣たちは多くが二条御所で討ち死にしたか、離散しているために今は藤孝しかない。この地で待つていれば誰かしら帰参してくるだろうが、誰がいつ来るか分からないのを待つていても仕方がない。

そんな義輝の心中を察したのか、今まで沈黙を守っていた信綱が志願を申し出た。

「儂が越後へ参りましょう」

「勢州殿が？」

信綱は本来、最後まで何も発言しないつもりだった。そもそも幕臣

でもない自分がこの場にいることが相応しいとは思っていないのだ。しかし、あまりにも義輝側の人間が少ないので藤孝から評定への参加を要請され、末席から評定の行方を見守っていた。

「管領様とは関東出陣の折、面識がございます。それに関東へ出馬されているやもしれませぬからな。関東であれば、僕は地理にも明るうござる」

信綱は元々関東管領・山内上杉家の重臣長野家に仕えていた。長野家は上杉家を継いだ輝虎にも従っており、永禄三年（1560）の関東出陣では長野家も輝虎に従っており、剣豪としても長野十六槍としても武名を轟かせていた信綱は輝虎の目に止まっていた。翌年に小田原城を攻めて鶴岡八幡宮で関東管領に就任し、越後へ戻るまで何度か信綱は輝虎と酒を酌み交わし、太刀合いも行った。

「勢州殿であれば申し分ない。是非にも」

「合い分かった。されど僕も何度も越後との間を往来するわけには参りませぬぞ。後任は、定めておいて頂きたい」

「承知した」

こうして上杉輝虎の許へは信綱が派遣されることになった。後は輝虎の動向次第で上洛時期を定め、上方にいる反三好の勢力に声をかけるだけ。そう誰もが思った。義輝以外は……

「もう一人、声をかけておきたい者がある。輝虎が上洛できぬともこやつが味方となれば三好を討ち破れるやも知れぬ」

「はて？何処の大名ですかな」

「誰もわからぬか？」

皆が考え込む。関東管領たる上杉の代わりになるような大名。義輝

の口振りからすると、こちらと軍勢を合流できる大名に思えるが、甲斐の武田に駿河の今川、西国の毛利と名が上がるがいずれも上洛軍を起こせるような者たちではない。結局、誰も答えを見つけない事が出来ず、義輝が口を開いた。

「織田、信長よ」

「の…信長!？」

意外な名前に皆が驚き、様々な反応を見せるが、中でも義景が一瞬だけ露骨に嫌そうな顔をしたのを義輝は見逃さなかった。

「左衛門督。何ぞあるか？」

「いえ、織田など頼りにならぬかと思ひまして…」

「余は一度、上総介（信長）に会ったが、なかなかの大将であつたぞ」

永禄二年（1559）。この年の初めに義輝は全国の諸大名に上洛を命じた。表向きは義輝の帰洛を祝うものであつたが、その実が打倒三好であつたことは改めて言うまでもない。そして真つ先に上洛してきたのが尾張の織田信長だつた。この事を義輝は評価しているのだ。ちなみにその次に上洛してきたのが当時長尾景虎と称していた上杉輝虎である。

一方で義景は信長が嫌いだつた。かといって、二人は会つたことがあるわけではない。不満の原因は、朝倉家と織田家の出自にあつた。

両家の共通点は共に斯波家の家臣だつたこと。朝倉家は斯波家が守護を務める越前の守護代であり、織田家は尾張の守護代である。しかし、義景は守護代の家系だが信長は守護代家老の家系だつた。よつて信長の方が一段格下となる。ただ信長側にも言い分はある。朝



倉家は応仁の乱の時、主家である斯波家を裏切って越前守護へ昇格したが、織田家は尾張で斯波家を支え続けた。なので勝手に格下にされる云われはないが、自分が上と思っっている義景にはその理屈は通じない。

だが義景が信長をどう思おうが、今の信長は尾張一国に伊勢と美濃の一部を領している。上洛してきたときは未知の武将だったが、翌年に桶狭間で東海三ヶ国を治める今川治部大輔義元率いる軍勢を寡兵にて討ち破ったことによりその将器が本物であることが証明されている。無視できない勢力だ。

「織田家であれば、某を御遣わし下さい。必ずや御味方に引き入れて御覧に入れまする」

「明智か」

義輝との連絡役を務めていた光秀も、この場に参加している。しかし信綱とは違う理由、客分という身分の低さから今まで一切発言をしていなかった。義輝はその光秀が突然に織田家との使者へ志願してきた理由を掴みかねた。

「織田様の御正室・帰蝶様と某は従兄妹同士でありますれば……」  
「なんと!？」

これには義輝はもちろんのこと、朝倉の者たちも驚いた。義景などは『そのようなこと聞いておらぬぞ』と心の中で叫んでいることだろう。

(こやつ……左様な奇縁を持つておったか)

光秀のことを義輝は元々それなりの武家の出だろうと思っっていたが、

大名の正室と血縁関係にあるほどだとは思わなかった。そもそもそんな者が、光秀ほどの才を持つ者が何故いつまでも客分のままなのか。

（余ならばすぐにでも直臣として召し抱えるが、左衛門督はとんだ阿呆じゃ）

この時、義輝は初めて光秀が欲しいと思った。

「ならば明智、許す。そちが使者を務めい」

「されば公方様に御許し頂きたいことがございます」

「なんじゃ」

「場合によつては美濃守護職、織田様に任せること御許し下さい」

「ふむ…」

悪い手ではない、と義輝は思った。既に尾張の支配権は信長に認められており、織田家は將軍公認の守護大名である。一方で美濃を領す斎藤龍興も父・義龍の頃に認められて相伴衆に列している。

（最良なのは余の調停の許で両者が和解し、共に上洛軍を発してくれることだが…）

そう都合良くいくことなど考えない方がいいと義輝は思った。あまりにも虫が良すぎる。ならば一方に濃尾を任せるしかない。上洛後、濃尾にまとまった義輝方の勢力があれば強力な後ろ盾になることも考えられた。

（斎藤龍興は酒色に耽り、家臣の竹中某に居城を追われたと聞く。そんな男に美濃を任せるよりは……）

義輝も認めた先代の義龍が生きていれば違ったかも知れないが、信長と龍興では圧倒的に器が違いすぎた。

「よい、許す。一切を明智に任せる故、必ずや織田を余の味方に引き込めい」

「ははっ！」

平伏する光秀。そこに反応したように義景が飛び出てくる。

「お…お待ち下され！」

「なんじゃ、左衛門督」

「軽々しく守護職を任せるものではありません。織田風情に守護は荷が重うございます」

嫉妬、妬み、そういったものが義景の中を支配していた。が、義輝はそんなものに目もくれず…

「不服か。そなた家臣とて、先ほど軽々しく加賀守護に任じて欲しいと願い出て参ったではないか」

「そ…それは……」

義景がキツと景鏡を睨み付ける。一方で景鏡もばつを悪そうに目を逸らしている。

「それに必ずしも上総介に美濃守護を任せるといった話ではない。明智も場合によっては、と申しておろう。そうであるな、明智よ」

「はっ。美濃守護職はあくまで織田様を御味方に取り込むため、交渉の材料にたく申したまにございます」

「だ、そうだ」

「そ…それならば構いませぬが……」

納得したようでしていない義景が渋々引き下がる。その姿を見て、  
義輝は改めて義景を頼りなく思った。

（もつともそんな手に乗ってくるほど上総介は阿呆ではあるまい）

そんな浅はかな男ならば、初めから頼りになるわけがない。恐らく  
織田上総介という男は、そんなに甘くはないはずだ。それに頼りに  
なる男なら、方便でなく本当に美濃守護を任せてもいいと義輝は思  
っていた。

（輝虎と信長……余の命運はあやつらに懸かっているのやもしれぬ  
な）

義輝はかつて一度だけ会った男たちの顔を思い出していた。

そして評定が終わった。

【続く】

**第五幕 希望 - 上洛への道 - (後書き)**

少し間が空きました第五幕です。

今回は序章最終幕。今回の話にあった信長と謙信が登場します。

## 第六幕 将星二つ - 軍神と大うつけ -

六月二日。

尾張国・小牧山城

尾張の国府である清洲より東北にある小牧山に築かれた城はその山全体を城郭と化しており、多数の曲輪が点在、配下の将の屋敷が建ち並び、南西一帯には城下町も形成されている。主力の兵も置いており、凡そ二年前に築かれたとは思えないほどの賑わいがあった。信長の美濃経略における最前線基地とした意気込みが感じられる。実際、美濃斎藤家の本拠たる稲葉山城とは僅か四里（16km）ほどしか離れておらず、敵対勢力同士の本拠地がこれほど近いのは異例だった。

その地に、大うつけと呼ばれた織田上総介信長はいる。

「御屋形様。明智十兵衛と名乗る者が目通りを求めております」

「明智…とな？」

「はっ。何でも帰蝶様に縁がある者とか。追い返しましょうか？」

「いや、よい。すぐにこちらへ通せ。それと於濃（帰蝶）も呼べ。

身内とならば、会いたがるっ」

信長は簡単に目通りを許した。自身の室のことを思っただけではない。帰蝶の縁者となれば美濃の出身、美濃攻略に有益な情報が得られるかもしれないと考えたからだ。

小姓は信長の前から下がると、先に入ってきたのは帰蝶だった。

「殿。十兵衛殿が参られたとか？」

「うむ。間もなく参るであろう。そちの縁者と聞いた」

「はい。我が母の甥に当たる方です。私が殿の許へ嫁ぐ前までは稲葉山のお城で何度か会ったことがございます」

「で、あるか」

帰蝶の母、つまりは斎藤道三の正室は小見の方と言い、光秀の父である明智光綱は兄に当たる。ちなみに両者とも死没している。

「御屋形様。明智殿を御連れしました」

「入れ」

襖がサツと開けられる。その先に平伏する一人の男へ信長の視線は送られる。

「明智十兵衛光秀にございます」

「で、あるか」

たったそれだけで両者の挨拶は終わる。信長はそれだけで何も話さない。それだけだったにも関わらず、光秀の額には冷や汗が滲み出していた。ただ鋭い眼光を叩きつけられている。部屋中の空気が張り付き、凝縮するような感覚だけがヒシヒシと伝わってくる。

(な…なんだ、この威圧感は……)

それが、光秀の抱く信長の第一印象だった。言葉が詰まっている光秀を案じ、帰蝶が助け船を出した。

「十兵衛殿。長良川の合戦の折、一家が離散したと聞き案じておりました。こうして再びお会いできたこと、嬉しゅうございますよ」

「は…はっ。帰蝶様も御健勝のようで何よりでございます」

その時、光秀は初めて帰蝶がいることを知った。正直、声をかけてくれたことを感謝した。見知った人間の声を聞いたことで少し緊張が解れた光秀はようやく話に入ることが出来た。

「此度は將軍家の使者としてまかり越した次第にございます」

「將軍家とな？…義輝公は御健在ということか」

信長がこう思うのも、巷では義輝は三好・松永に暗殺されたという噂が蔓延していたからだ。光秀も道中でそれを聞き、知っている。ただ余りにも噂の広がり方が異常なので信長自身は真偽を掴みかねていた。

「義輝公は兵を求めておられるのか」

「はっ」

いきなり本題を突かれた光秀は驚いたが、話が早くて助かるとも思った。ただ信長としては義輝が生きていて自分に使者を送ったという事実から導き出した発言に過ぎない。

「公方様は越前におられます。近く上洛し、逆賊を討ち平らげる所存なれば、織田様にも逆賊征討の軍へ加わらることを望んでおられます」

「当家は今、美濃攻めの真つ最中である」

信長は兵を出せる出せないとは言わず、織田家の現状を語った。これが断り文句であることくらい光秀も分かる。しかし使者を務めると己で言い出した以上は、簡単に引き下がる訳にはいかない。



「齋藤家との和睦、公方様を取りなしても構わないと申しております」

和睦のことは義輝と話してはいない光秀だったが、一切を任せると言われている以上は許容の範囲と捉えている。しかし、信長は和睦の提案を即座に拒否した。

「何故にございますか？」

「そなたも蝮殿（齋藤道三）に仕えていたのなら知っておろう。美濃は蝮殿より儂に譲られておる。龍興は不当にも美濃を占拠した義龍が子、また仇だ」

道三が長良川合戦で実子・義龍に敗れて自害する寸前、女婿の信長へ『美濃を譲る』という遺言を書き残した。それが信長の美濃攻略の大義名分でもあるし、そのために信長は広くそれを流布させた。そのために光秀もこのことは知っている。

「そこを曲げては頂けませぬでしょうか。公方様のことは、天下の大事にございます」

信長が美濃攻めに拘る気持ちは光秀にも分かる。光秀としても道三を慕っていたのだから、龍興は美濃国主に相応しくないと思っている。ただ、だからと言って光秀も引き下がるわけにはいかない。信長に何とか考え直して貰おうと必死に説得を続けるが。

「明智とやら。そなた、岳父の仇討ちを小事と申すか」

「い、いえ…：そのようなつもりは…：！？」

即座に平伏し、謝罪する。だが怒ったかに見えた信長の傍らで帰蝶が二人のやり取りを見て『くすくす』と楽しそうに笑って見ていた。

「殿。十兵衛殿をからかうのはその辺にしたら如何です？」

信長に嫁いで十六年。織田三郎信長の人となりを見れば承知している。世間で言われている以上に気むずかしい人物であるが、岳父・道三を尊敬してはいるが、決して仇討ちなどに囚われる人物ではない。信長が道三の仇討ちを本気で考えていないことを信長は知っているし、上洛を望んでいることも知っている。

「わかった、わかった。明智とやら、儂は三好・松永なぞに与する気はない。義輝公に御味方仕ると伝えてくれ」

「有り難き御言葉、しかと公方様へ御伝え致します」

初めは難航すると思われた交渉が、帰蝶の御陰で意外にも簡単に進んだ。もはや頼れるものはないと考えていた自身の縁にこれほど感謝したことはない。しかし、光秀は戦国武将のしたたかなる一面を承知している。未だ信長から『兵を出す』との言葉が告げられていないことを忘れてはいなかった。

「つまり兵を出して頂けると考えて宜しゅうございますか」  
「構わぬ」

だがこれも簡単に目的の言葉を引き出せた。どうやら織田信長という男、根は単純なようだ。しかし、まだ引き下がるわけにはいかない。ただ兵を出すだけでは、数百でも一千でも兵を出したことになるからだ。実際にそうやって約束を守ったことにする大名もいた。それでは何の意味も無い。

「されば兵一万を御願ひ申し上げます」

兵数を指定するということは臣下の者へ対する扱い方であるが、あくまで自身は將軍の使者であるので失礼には当たらないと光秀は考えている。それに織田家なら一万ほどは軽く出せる力を有しているし、一万は出して貰わなければ三好の兵力を上回ることは出来ない。しかし、これに信長は難色を示した。

「当家の事情は知っております。兵数の約束まで出来ると思っておりますか」  
「承知しております。されど御約束を頂ければ、公方様も御安心召されるかと」

「義輝公へ嘘は申せぬ」  
「ならば御家の御事情が変われば、如何でしょうか」  
「なに？」

信長が意味深な光秀の発言に身を僅かに前のめりにさせている。それを光秀は見逃さなかった。興味を持っている証拠だ。

「美濃守護職。公方様は織田様に任せてもよい、と申しております」  
「それはまことか」  
「越前を發つ前、しかと承っております」  
「書付はあるか？」  
「今はごさいませぬ。されど織田様が御望みであれば、すぐにでも公方様より頂いて参りましょう」

光秀は完全に信長が餌に食らいついたと思った。書付とは、いわゆる証文である。それを要求するということは、完全にこちらの掌に乗ったと考えていい。

「よい。義輝公の御心は伝わった。それに儂は美濃守護になぞなるつもりはない」

「……は？」

光秀は理解できなかつた。守護職は美濃攻めにおいて道三の遺言状以上に確実な大義名分になるはずだつた。何せ道三がいくら信長に『美濃を譲る』と言ひ残したとはいへ、道三自身は美濃守護ではない。守護職は子の義龍が本来の守護・土岐氏を称することゝ継承している。つまり表向き正当な美濃国主は義龍の子である龍興の方なのだ。

それを覆すのが、今回の裁定であつた。元々守護職を交渉の材料にする気だつた光秀だが、こつとも拒否されるとは思つていなかつた。

「いま義輝公より守護職を賜つたとしても、名のみであり実が伴わぬ。それでは当家の力を義輝公に理解して貰えまい。美濃平定は当家の力のみで行う。義輝公の力は借りぬ」

「さ…されど、それでは美濃平定に時間がかかりましょう。公方様の上洛に間に合ひませぬ」

「兵は出すと申した。それでよからう。下がつて義輝公へ伝えるがよい」

それを最後に光秀は有無を言わずに閉め出された。あつという間の出来事だつた。

渋々光秀は越前へ戻るしかなかつた。幸い、信長との面談は四半時（30分）もかかつていないため、その日の内に小牧山を発つことが出来た。

だが一方の信長はこれを機に忙しく動き始める。先ほどまで光秀が座つていた場所に、柴田権六勝家、林佐渡守秀貞、丹羽五郎左衛門尉長秀、木下藤吉郎秀吉が座つていた。

「先ほど將軍家より使者が参り、儂に上洛を求めてきた」

四人から『おお』と感嘆の聲が漏れる。それほどまで彼らにとって上洛は特別なことを意味していた。

「さらには儂を美濃守護に、と申してきたが、それは断った」

ここで信長の家臣たちは『何故か』と訊ねるような真似はしない。ただ黙って信長の意を受ける。それが織田家の常識だった。

「が、その話は使える。…五郎左」

「はっ」

「この話を聞けば、加治田衆は落ちるか？」

「確実に落ちまする」

中濃一帯に勢力を有する加治田衆は佐藤忠能を盟主とする土豪たちである。信長の命を受けて長秀が調略を仕掛けていた。

「権六、兵を整えよ」

「美濃攻めですな。腕がなるわい！」

勝家が握り拳を左掌に叩きつけ、闘志を湧き上がらせる。

「猿（秀吉）。その話を美濃中にはらまけ」

「はっ。同時に西美濃衆を斎藤家より切り離しまする」

「ふっ…ようわかっておる」

信長は顎髭を擦りながら、満足そうに頷いた。秀吉のこういう切れるところを信長は買っているのだ。

「中濃が落ち、西美濃衆が儂に従えば、東濃は自ずと靡く」

「美濃平定は成つたも同然ですな。わっはっはっは！」

秀吉が馬鹿笑いを始める。他の三人は苦々しくそれを見ているが、この話自体は織田家にとって悪い話ではないのでそれを咎めるような真似はしない。

「佐渡。熱田、津島の商人共に命じ、上洛の仕度に取りかかれ」

「い…今すぐにでございますか!？」

秀貞が驚くのも無理はない。あくまで上洛は美濃攻めが終わった後のことだと考えていたからだ。それは間違っていない。

「当たり前であろうが。でなければこの場にそちを呼んだりしやせぬ！」

そう言い放つと、信長は部屋から出て行ってしまった。残された四人は、後は信長からの命令に従順に実行するしかない。

そして十日後。加治田衆が織田家へ通じた。これに怒った斎藤方が兵を出してきたが、織田軍の前に敗走し、中濃一帯は織田方となった。

〓 〓

六月七日。

越後国・春日山城

日本海に面するこの山城は関東管領の御城である。主たる上杉弾正少弼輝虎は去る三月に北条相模守氏康に攻められて窮地に陥っている関宿城主・梁田晴助を救援するために関東入りしていたが、輝虎が下総国へ入ると東関東の諸侯がこれに合流、梁田勢の士気も上がり奇襲を仕掛けてきた。流石の氏康も果敢徹せず、上杉本隊とは戦わずに兵を引いた。

救援に成功した輝虎は今月の初めに春日山に戻ってきた。そして、將軍・義輝の死を報されたのである。それから義輝の御霊を弔うため、毘沙門堂へ籠もっていた。とは言っても義輝は死んではいない。京での変事が関東へ届く頃には尾ひれが付いて死んだことになっていたのだ。

（逆賊共に上様が……やはりあの時、奴らを成敗しておくべきだった）

輝虎は振り返る。永禄二年（1559）に上洛した時のことを。

あの上洛の目的は、表向き上杉の家督相続と関東管領就任の認可を得ることだったが、実際は三好長慶を討って義輝を扶（たす）けることであつた。その為の、兵五千だつたのだ。

義輝の周辺を取り巻く情勢は厳しいものだったが、六角や畠山など反三好勢力の力も衰えておらず、輝虎は勝機を感じていた。しかし、義輝からすれば上杉勢五千が加わったところで勝ちを得るのは難しいと判断しており、三好討伐の許可を与えなかった。

（上様の命令を無視してでも実力行使に及ぶべきだつた……）

と、義輝の死を報された輝虎は悔やむしかなかった。そこへ小姓か

ら来客の報せが入る。

「御実城様」

「何用か。ここへは入るなと申し付けておったはずだが」

怒気を滲ませ、小姓を咎める。輝虎にとって毘沙門堂での祈りは神聖なものであり、何人たりとも邪魔は赦さなかった。家臣たちにもそう言いつけてある。故に咎めている。

「そ…それは重々承知にございますが…、上泉伊勢守様が目通りを願っておりますれば……」

「勢州が…か？」

珍しい、と輝虎は思った。

信綱は先代の長野家当主・業正が死去した後、主家を致仕していた。『郎党のみを連れ、諸国放浪の旅に出る』と春日山に挨拶に来た信綱本人から聞いている。それ以来、輝虎は信綱と会っていない。

しかし、すぐに会うかどうか迷った。実際、今は義輝の御霊を弔う祈りを捧げているところである。何よりも神聖で、大事な儀式だ。

しかし小姓は主君の傍近くに寄り、耳打ちした。

「伊勢守様はどうやら、上方から参られたようにございます」

「なに!？」

思わず声を上げてしまった輝虎が、小姓は構わず続ける。

「公方様のことについて、急ぎ御実城様に御伝えしたいことがある



とのこと」

「…すぐに会う」

と言つて毘沙門堂を出た。

半刻（1時間）後、四年振りの輝虎と信綱の対面となつた。現れた信綱は以前と変わらぬ姿であつた。

「久方振りじゃ。勢州よ」

「管領様も御健勝で何より……」

「上方より参つたと聞いたが？」

「はい。つい先日までおりました」

「上様が亡くなられたと聞いた。嘆かわしいことじゃ。何でも勢州は上様がことで儂に伝えたいことがあるとか」

「左様にございますが、その前に一つ訂正がございます」

「訂正？」

「公方様は御健在であらせられます」

「ま…まことか!？」

義輝の生存。それは衝撃だったが、まずは無事を喜んだ。何よりも輝虎にとって足利義輝という人物は、聡明かつ勇猛さを兼ね揃え、霸気に溢れた希有な存在。己の思い描く征夷大將軍そのものであり、乱れた秩序を取り戻す唯一の希望だつたからだ。

「今は窮地を脱し、越前へ身を寄せられております」

「越前…左衛門督殿のところか。ならば安心じゃ」

越前朝倉は上杉家にとって好意的な相手であるため、輝虎は心から安堵した。

「此度、その公方様に頼まれて管領様の許へ参つた次第」

「將軍家よりの使者……と申されるか」

「……そうなりますな」

ならば、として輝虎は立ち上がり、座を信綱に明け渡そうとする。

信綱が將軍家の使者であるのなら立場上で上司ということになるため、上座を明け渡し、下座より上様の御言葉を賜らなければならぬ。

しかし、信綱は首を横に振ってそれを拒否した。

「此度は公方様より命令を受けて参つたものではございませぬ。あくまでも依頼で参つたのです」

「はて？」

輝虎は臣下なのだから、命令すればいいだけのことである。そこら辺が輝虎には理解できずにいた。しかし、信綱は構わず続けた。

「公方様は逆賊の討伐を御望みです」

「で、あるう。三好・松永らの所行、赦されるものではない」

「そのため、管領様に上洛を求めておられます」

「……………」

輝虎は目を瞑った。

長慶を失ったとはいえど三好・松永らの力は侮れない。朝倉という新たな味方を手に入られたとはいえ、教興寺合戦の結果、上方に残る反三好勢力の力が弱まっており、義輝が自分の力を必要とするのは己でも理解できる。

「されど勢州よ。関東での争乱、日々激しくなっており。先日も甲斐の武田信玄が西上野へ迫っておりとの報知を受けた。近々また関東へ出陣するつもりじゃ。とても儂が離れられる状況ではない」

現在の関東は予断を許さない状況が続いていた。

関東制覇を狙う北条氏康はもちろんのこと、その盟友・武田信玄も輝虎が越後へ帰る度に兵を入れている。そして輝虎が関東へ赴くと撤退し、また兵を出すというイタチごっこが続いていた。

「分かっております。故に公方様は、これは命令ではなく『頼み』だと仰いました」

「上様が儂に頼む…と？」

「はい」

胸が痛かった。主君に『頼み』と言わせている自分の胸がただただ痛かった。そして主君の窮地に駆けつけることの出来ない己の不甲斐なさを罵った。

「管領様。公方様は以前と同じく五千の兵でも構わない、と仰せです。それであっても上洛することは叶いませぬのか？」

信綱は率直な疑問をぶつけてみる。数年前までの関東の情勢は知っているが、ここ一、二年のことは諸国を放浪しており断片的にしか知らない。だが上杉家の最大動員数は二万を越えるはず。多くの守備兵を残していれば上洛は可能ではないかと考える。

「その程度であれば出来なくはないが……」

輝虎は迷っていた。

武蔵国の大半は北条家に奪われたままだが、上野、下野、下総、常陸、上総、安房と反北条の勢力が中心に活気づいている。急先鋒たる佐竹右京大夫義昭も常陸を統一する勢いだし、前年に国府台で北条に破れた里見刑部少輔義堯も未だ勢力を保っている。

自分が離れるという不安があるが、信綱の言うとおり五千程度なら上洛させる余裕がないわけではなかった。しかし、同時に五千を上洛させたところで、と思うところもある。充分に役に立つ自信はあるが、関東管領たるものとして、万余の兵を率いていきたい気持ちが強い。

「管領様。先の変事で生き長らえた後、公方様は死のうとなされたことがある」

「は？」

唐突に話を始める信綱に戸惑う輝虎。だが話の内容が内容だけに黙って聞く。

「妻子を、母御を殺されたのじゃ。無理もござらん」

「……………」

「管領様には妻子はおらずとも、母御はおりましよう。その無念、如何ばかりのものか御分かりになりましよう」

「……………」

「妻子とはあの世で会おうと約束までしたらしい。母御ともな。だが公方様は生きた。生きてしまった。儂らが御助けした所為だが、公方様はそれを恥じた」

「……………」

「恥じたからこそ、朽木谷の城で三好の軍勢が迫って来たとき、逃げる術があったにも関わらずに公方様は城を枕に討ち死にする覚悟

であった。されど、また生きた」

「それは何故？」

「側近の細川兵部が説得した、明智十兵衛なる者もな。されど本音の部分は知りませぬ。公方様に直に会い、聞かれたらよい」

悲しい話だった。もし自分が同じ立場だったらどうしただろう。妻子を失う気持ちは分らないが、もし母が自分の家臣の手に掛かって死んだとしたら…、恐らく自分は怒り狂い、何人の制止も振り切りその者を八つ裂きにするだろう。それが叶わぬなら、助けられなかった己を恥じて死を選ぶ。そうするかもしれない。

(上様はそのような苦悩を抱えておられるのか……)

輝虎は胸に熱いものが広がっていくのを感じた。そして己を恥た。関東管領として万余を率いて駆けつきたいと考えた己の見栄を。甘さを。

自分に言い聞かせる。『もう結論は出ているのではないか』と。

「上洛しよう」

輝虎の決心は固まった。

「まことで？」

「うむ。されど時期は当家の都合に合わせて貰いたい」

「それで、時節はいつ？」

「雪が降り始めれば、甲斐の武田も動けぬ。それまでに関東へ兵を送っておれば、北条輩も好き勝手は出来まい」

「となれば、十月の末辺りで？」

「一乗谷で御会い致しましょう、と上様に伝えてくれ」

「しかと、伝えましょう」

「…ああ、それと」

思い出したように輝虎が付け加える。

「一向一揆との和睦、上様に調停を依頼したい。どうやら裏から信玄めが手を引いているようなのだ。あれらに邪魔されたら堪らぬ」

「それならば、既に細川兵部が動いております。御安心を」

「それは重畳。もっとも、邪魔されたところで薙ぎ払うだけだがな」

「管領様なら造作もありますまい」

「当たり前じゃ」

二人が微笑み合わすことにより、この会見は終わった。

こうして上杉輝虎の上洛が決まった。

織田信長と上杉輝虎……戦国の世に生まれ出し二人の将星が、將軍・義輝の馬前で轡くわを並べる時が、刻一刻と近づいていた。

上洛の時は近い……

【続く】

## 第六幕 将星二つ - 軍神と大うつけ - (後書き)

序章最終幕です。のでいつもよりちょっと長くなりました。

序章を書き終えるまで、かなりかかったように思います。これではこのお話を書き終えるのがいつになるのやら……

とは言っても次章の上洛編やその次、最初の方に書いたと思います  
が、シナリオはほぼ出来上がっており問題は私の根気のみ。有り難  
いことに購読者も増えておりますし、感謝の一言です。頑張るしか  
ありませんね。頑張ります。

また本編ですが、この辺りから歴史の針が史実より早く進み始めま  
す。そして変化し始めます。引き続き寛大な御心を持って見て頂け  
ると幸いです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4359y/>

---

剣聖將軍記

2011年11月26日01時45分発行